

創作×ご飯の合同誌

Companio

[カンパニオ]



目次

少しの話 篠田くらげ

四十路リーマンと女子学生の夏。 ボンゴレーノ麴

PEACE of cake 佐々木奈々子

イクエータ 河寫レイ

プレミアム『フライ』デー 巫夏希

例えばの話 豆崎豆太

参加者一覧

少しのはなし

篠田くらげ

わたしこと相原沙織は大学生だ。暇な女子大生ってやつかしら。実際には大人が考えるほど学生は暇ではないし、バイトもレポートも手帳を占領している。でもコンサートに行く時間がないほどではない。ありがたいことに。

その日はちようど地元のコンサートホールに来ていた。特に有名でない指揮者が特に有名でないオーケストラを連れてやってきていた。こういうところに来ると困るのはナンパ。といても若い男ではない。ナンパをするような若い男はこういうところはテリトリーにしているらしい。おじさんだ。

「きみ、クラシックに興味があるの？ この曲はねえ」
ぞっとする。

「そうよ。クラシックに興味があるの。あなたにではなくて」

そうやってかわしている。

その人はコンサートが終わったあとも、会場にずっと座っていた。といっても若い男ではない。おじさんだった。夏なのに茶色いコートを羽織って、それが妙に似合っていた。わたしが声をかけてしまったのも、そのコートが似合っていたからだ……なんて、気取りすぎているだろうか。

「クラシック、好きなの？」

「ん？ クラシックが好きというより、今日の曲が好きただけだな。嬢ちゃんはクラシックが好きなのか？」

「嬢ちゃんじゃないけどクラシックは好き。今日の曲も好きだけど」

「そうか」

おじさんはわたしから目をそらして本を読み始めた。それでわたしも会場を出て、家に帰った。

「それだけなわけ？」

みい子はパックの牛乳を飲みながら大げさにのけぞってみせた。

「それだけよ」

「まさかそのおじさんと恋に落ちたとでもいいますかこの嬢ちゃんは」

「嬢ちゃんじゃないってば。そして恋には落ちてない」

「そりやそうか」

わたしの抗議をさらりと流してみい子はパックの牛乳をずずず、と飲み干す。大学に入ってから友達は何人もできたけど、このやや変わった同級生に「みい子」という可愛い名前は似合わないと思う。しかし、本名だ。前野みい子。

「それで、それだけの話なの？」

「うーん、続きがある」

昨日の話だ。わたしはまた同じコンサートホールに来ていた。そこであのおじさんに会った。今度はロビーで。

「あら、この前のおじさん」

「ん？ ああ。この前の嬢ちゃんか」

「嬢ちゃんじゃないわよ。大学生」

「大学生は嬢ちゃんだな。それに俺はおじさんじゃない」

「勝手ねえ」

わたしは笑った。それで気まぐれを起こしたのかもしれない。

「どう？ ご飯でも」

わたしはパスタを頼み、おじさんはピザを頼んだ。それからワインもちよつと頼んだ。嬢ちゃんじゃないから。

「嬢ちゃんが昼間からワインなんざ飲むな」

「嬢ちゃんじゃないから飲むわけよ。おじさん、名前は？」

「北川康信。健康の康に信じるだ」

「わたしは相原沙織よ」

「そうか」

おじさんは、いや、康信氏は、あまりわたしに関心がなさそうだった。ピザを食べている。

花の女子大生と食事ができるってのに、ずいぶんじゃない？

「ねえ、少しはクラシック聴くんじゃしょ？」

「少しは」

康信氏は答える。

「だが人に自慢するほどじゃない」

「でも今日の曲はいいわよね。あれは奥さんを想って作られた曲なんですって。奥さんは

才女で、外国に行っちゃってしまっ、それを想って作曲されたの」

「詳しいな」

「好きだからね」

それからわたしと康信氏は少し話をした。康信氏は小さめのピザを追加した。ピザ、好きらしい。

「だからさ、わたしね」

「なあ」

と、康信氏はわたしをさえぎって言った。

「女房がどっか行っちゃまった時に、作曲なんかできるもんかね」

「うーん、それが創作のエネルギーになるってことなんじゃないの？ よくわからないけど」

「そうだな」

康信氏は少しさびしそうに笑った。

「左様でありましたか」

みい子は無表情でフルーツ牛乳を飲んでいる。この子は牛乳が好き。

「まああれよ。少しは気になったわけよ」

『少しは』ね。で、沙織、あんたはおじさんにクラシックの蒔蓄を披露した挙げ句おじさんをナンパしたのね？」

「そんな大げさなもんじゃないわよ」

「とか言ってコンビニのピザを食べてるところがまたアレなわけ」

「ふむ」

ピザはパリパリといい音がした。またあのコンサートホールに行かねばなるまい。

「今日の曲はね、自分の才能に絶望した作曲家が作った遺作よ」

わたしはこの前と同じ。パスタを食べ、康信氏はこの前と同じ。ピザを食べていた。ふたりとも食に関しては保守的らしい。

「その割にはいい曲だな」

「やっぱり才能あったんじゃない？ 天才にだけわかる才能の不足みたいなのなるほどな」

康信氏は今日も言葉少なだ。わたしに関心、あるのかしら。

「ねえ」

思い切って訊いてみる。

「わたしの話、つまんなくない？」

「面白いぜ。嬢ちゃんはまだガキだが色々詳しいな」

「嬢ちゃんでもガキでもない。……でも面白いならよかった」

「なあ、嬢ちゃん、もし天才がいるとしてさ。やっぱり天才ってのは孤独なもんかね」

「そうねえ。うーん……すごく天才だったらそうかも」

そんなことが何度かあった。気になる。が、恋ではない。断じて。

「沙織は相当な年上好きなのね」
みい子はこちらからかうが違う。断じて違う。彼氏はいないけど。

六月二十三日。その日が、その日だった。

「今日はね、作曲家の友達と父親が亡くなった年に作られた曲。すごく明るいでしょ？ わたし、こういうところに作曲家の辛さがあるんだと思う。孤独なのに、寂しいのに、こんなに明るい曲が作れちゃうってことが」

わたしはワインが進んだからかいつもより饒舌で、康信氏はいつもより静かだった。わたしがフォークを動かす音だけがする。

「嬢ちゃん、今日でさよならだな」

「え？　なんで？　もう来ないの？」

「ああ。ベルリンに行く。女房がベルリンで振ってるからな」

康信氏をはじめて名刺を取り出した。「指揮者　北川康信」

「え？ えええ？ おじさん、指揮者だったわけ？」

わたしはみい子よろしくのけぞった。

「しばらくはそこで振っている。気が向いたら来るんだな」

康信氏は笑った。少しだけ。

「どよーん」

「失恋ですか」

みい子がコーヒー牛乳をすする。

「少しよ、少し。でも」

「でも？」

「ドイツ語、やる」

「……そうですか」

いつか、わたしはベルリンに行く。そしてまた蒞蓄を披露してやるのだ。ベルリンファイル

の指揮者に。

四十路リーマンと女子学生の夏。

ボンゴレーノ麴

「ねえ、いくつ食べる？」

さんさんと日差しが入るワンルームのアパート。ク
ーラーはあれども、まだ我慢できる範疇だと思つと、
スイツチを入れるのを躊躇つてしまふ。

ぐらぐらと煮たつた鍋のなかに今まさに投げ込まれよ
うとしている素麺の束を想像する。灼熱の地獄へ投函
される白装束……は、今ここで仕上げにかかっている
手元の書類たちなのだが。

素麺の数について、おざなりに「適当で」なんて言
う前に「とりあえず三つね」とかなんとか聞こえてき
た。声の主を見やれば、見慣れた制服姿に使い古され
た青いエプロン。女子が制服で自分の食事を作つてく
れているというのは多くの世界の男の夢かもしれない
が、こちらにしてみたら見慣れすぎてしまったが故、
むしろ娘の感慨である。

後輩兼親友夫婦の一人娘。泣き虫で甘えつたがりの
女の子は、あれよあれよという間に成長を遂げてしま
つた。自分が年を取るだけ彼女が成長してきたことを
思うと、知らず溜め息が出そうだ。

小さい頃は両親が仕事で遅くなる時を中心にして預
けられていた子ではあつた。けれど、いつからか自分
から、休日の口までもを一緒に過ごすために押しかけ
てくるようになっていた。小学五年生の夏休み、友達
と一緒に行つたという遊園地のお土産を、帰り道のそ
の足で届けてくれた時は、少し両親に申し訳なさを感
じたものだ。しかし幼い娘を放つて仕事に勤しんでい
たのは事実であつて、つまるところ自業自得。お土産
は有難く頂いておいた。

「もう！ 仕事は終わり！ 机の上、かたして！」

「ハイ」

彼女の一声に、卓袱台に乗せて向き合つていた書類
たちを床に下ろす。懐かしい記憶からも意識を引っ張
り上げる。最近、どうも小さい頃と比べてしまふ。悪
い癖だ。

十余年前には、彼女が画用紙を下ろしていたというの
に、今は正反対だ。

「今日は親父さんたちは？」

「？ おうちに居るよ？」

両手で抱えられてきた涼しげなガラスの平皿には、
盛られに盛られた素麺たち。いやこれ一袋分くらいあ
るんじゃないかという程の山になっている。食べる量
を訊ねた意味はあつたんだらうか。ちまちまと箸で突
き崩してみるも、一口分がやたらと大きくなつてしま



うだけだ。手元のめんつゆに浸しても、三分の一くらいしか味はつかなかった。そういうこともある。

「ね、明日はなにが食べたい？」

「毎回聞くよね、それ」

「だって、私も聞いてもらってたもん」

そういえば、確かに彼女を預かっている時、献立を考えるのが面倒でよく訊ねていた記憶がある。いつもの質疑応答を、彼女はどう捉えていたのか、思考の片鱗を窺い知ることができた。

彼女が小さい頃、食事は必ず誰かと一緒に食べるものではあったけれど、両親と共に食べる機会は、普通の子供よりもずっと少なかった。時期によっては両親ではない、自分と食べている時のほうが多かったかもしれない。

その時、いつも自分は考えていた。彼女にとって、食事がさみしいものではありませんように、と。

大きな一口で素麺を頬張る。彼女がキャツキヤと、まだまだ幼い顔で笑った。中学に上がってからというもの、制服というものが嬉しくて、今日のような休日でも着てやってくる。制服というものをパワーアップアイテムのように思っているのかもしれない。あと一月もすれば夏休みに入り、益々ここに入り浸る時間が増えることだろう。それもこれも、自分が残業ほぼぜ



口のホワイト企業に入っているからこそできる芸当。彼女に言っても、まだピンとこないだろうが。

しかし、まだ明るさを残す世界を切り裂くように歩き、帰宅した先、玄関を開ける瞬間だけは、少しだけ冷たい香りがする。冷凍庫の冷凍商品を取り出すよりももっと、密やかで微かで、遠慮がちな孤独。

「一人のご飯はさみしいでしょ」

思考を読まれたようでドキリとする。彼女はこちらの顔色など見ず、昔のようなフオークではなく、きちんと漆塗りの箸で素麺をつまんでいた。

「大人だからそういうことは思わないよ」

「そうかな。二人だから、うどんじゃなくても美味しいよ」

彼女が言っているのは、以前、幼稚園に通っていた頃の彼女と一緒に食べた手作りの素麺のことだ。小麦粉をえっさほいさとこねてみて、慎重に切った結果、とても素麺とは言い難い分厚さになってしまった。けれど彼女はそれを「おいしい」と食べたし、自分でもそう不味くはなかったな、と記憶している。

「もう大人だから」

同じ言葉を繰り返す。彼女は不服そうに頬を膨らませ、素麺を啜る。何回か口を動かした後、眉間に深い皺を寄せてこちらを見た。しかしてこちらにも、素麺たちとの戦闘に忙しく、無言を貫いた。



言つてはやらないが、素麺はところどころ固まってしまつていて歯に引つかかるし、柔らかくなりすぎて持ち上げる時に切れてしまうものも多い。大人だから、そういうことにいちいち日くじらを立てたりしないし、大人だから、そういう不器用さも食事のスパスとして飲み下せる。

薬味はうめぼし程度しかなくて、ワサビもシソも今日は無い。日印も何もない真っ白い山岳を突き崩していく箸は、さながらピツケルのようだ。

「じゃあ私が十六になったらお嫁さんになってあげる！ そしたら一人ぼっちのご飯は食べなくてすむよ！」

「却下」

いくら食事が命の糧といえど、その命がまず惜しいのだ。

【終】





いうことをきくよ配るよこのこころ切り分けたア・ピース・オブ・ケイク





崩れても倒れ伏しても揺るぎなくあなたの価値はただ此処にあり

イクエータ 河 河 河
河 河 河

「誤解……誤解だって」

「こーちゃんね、いくらこーちゃんでも学生はダメよ！」

「声が大きいよ、さっちゃん……」

「さよなら、こーちゃん。わたし、やっぱりもう続けられない」

「あの……」

思わず声をかけると、「さっちゃん」があたしに顔を向ける。さっちゃんからは、デキる女の香りでした。といつても、仕立てのよさそうなビジネススーツにパールのネックレスといった装いから察するに、というわけなんだけど。

「あなたね。こーちゃんだけはダメよ。もっといろんなひと……男のひとと女のひとも見なきゃね。まだ若いんだから。それにあなた、学校にはちゃんと

行つとくものよ？朝帰りでしかも学校サボつてこーちゃんとカフェで朝ごはんなんて」

「さっちゃん、そんな人聞きの悪い」

さっちゃんに迫られて、「こーちゃん」はたじたじだ。白シャツにジーンズ姿のこのひとは、どう考へてもビジネススーツ姿のさっちゃんには太刀打ちできないと思う。髪の毛だつてちよつとわさわさしているし。

「ということ、こーちゃん。こーちゃんももっとこーちゃんらしく、大人の女を相手なさい。こんな子供、相手になんかしちやダメよ！」

「こんな子供……そんな言い方しなくても」

「マスター、お勘定ください。こーちゃんはこの子の分はわたしが払います」

はいはい、と言いながら奥からマスターらしき男性がお勘定を持ってきて、さっちゃんに手渡している。「こーちゃん」と呼ばれていた女のひとは、頭をぼりぼり掻きながら視線でマスターになにかを懇願しているけれど、マスターの方はまるで子供を

叱るように「メッ！」っていう顔で彼女を睨み付けたかと思うと、やれやれといった表情で眉を八の字にしている。

「じゃあマスター、わたしもうここには来ません。好きだったんだけど、このカフェ。こーちゃんとの思い出が詰まり過ぎててつらいから」

「ほんとに残念だわ。もし心の傷が癒えたらまた来てね」

マスターのお詫びにも似た声掛けに返事もせず、そのひとはさっさと出て行ってしまった。

「こーちゃん、お願いだからこのカフェで振られるのだけはやめてちょうだい。もう何人目？ただでさえ少ないお客さんがまた減っちゃうじゃないの」

マスターはそう言うや否や吹き出して笑い始めてしまった。

「選んで振られてるんじゃないよう、ヨシノさん」

やれやれと首を振りながらマスターはカウンターの奥に戻ってしまう。そしてあたしの目の前で振られたばかりのこーちゃんは、テーブルに顔を突っ

伏してため息をついていた。初夏の朝の太陽が、ためらいがちにそのひとのやわらかそうな白いような肌を照らしていた。

「ひよつとして、あたしのせいですか？」

さすがに罪の意識を感じずにはいらなかった。

その朝は、一週間ほど自宅に引きこもった後の通学途中で、もう遅刻などという慎み深いことばでは表現できないほど遅れていた。だからもう学校へ行く気はとうに失せていて、乗り換えるはずの駅では降りずに、二駅先の繁華街で降りた。あたしは私服なのをいいことに駅前をぶらぶらするつもりだった。けれど、急に具合が悪くなって道にへたり込んでしまったのだ。そしてばつが悪くて顔を上げたら、このカフェのテラス席にこーちゃんが座っていて、ぼつちり目と目が合ったというわけだ。こーちゃんに、促されるまま店内のベンチ席まで連れられると、顔色が悪いよ、しばらく横になりなよなんて情けをかけられて。なんてことはない、朝ごはんを抜いて

家から出てきたのだから自業自得だった。

「あら、どうしたのこの子？」

「なんかね、顔色が悪くて」

素晴らしいタイミングであたしのお腹は鳴った。

「最近の子は朝ごはん食べないからね。こーちゃん、ちよつとホットミルク淹れてやって。わたしはなんか見繕うから」

「相変わらずひと使い荒いなあヨシノさん。キッチン入るよー」

「ちよつと前まで手伝ってたんだから覚えてるでしょ？」

「もう一年前だよ、辞めたのは」

「はいはい、働く働く」

ふたりの会話を聞きながら起き上がるタイミングを見逃してしまったあたしは、少しだけ目を閉じた。そしてほどなく、ホットミルクと表面がカリッと焼かれたサンドイッチがテーブルに運ばれてきた。

事件はその後に起こった。とろつと香ばしい中身のチーズに感動しながら、ぱくぱくとサンドイッチを頬張っているあたしを心配そうに覗いていたこーちゃんの目の前に、いつの間にかさっちゃんか仁王立ちしていたのだ。ちよつと前まで横になっていたあたしの髪やブラウスは、ほんの少しだけ乱れていたのかもしれない。それにしても妙な誤解の仕方をされたものだと思う。ただあたしにしても、それがどんな誤解なのかわかってしまうあたりに、もう自分は可憐な女子高生像からほど遠い存在になったんだなと思ってしまう。あたしはこのさっちゃん自分が自分勝手なひとだとも、こーちゃんが悪いひとだとも思わなかった。きつとふたりの中でしかわからないことがあったのだらう。それよりもなにより羨ましかったのだ。あのふたりの親密さが。それはその場で失われてしまったにしろ、少なくともその前まではあったであらう、その濃密な関係性が。

* * *

ランチの時間も終わり、店内にお客さんがいなくなつた二時半過ぎ、カフェ・イクエータのマスターであるヨシノさんが、「こーちゃんスペシャル」と呼ばれているマグを棚から取り出した。さっきまで携帯で誰かと話していたから、きつともうすぐ中山さんが来るのだろう。

「また振られるんでしようよ、彼女に」

「え？」

ヨシノさんがにこにこしながら、クロスでゆつくりとフォークを磨いている。あたしはヨシノさんの声が好きだった。それは間接照明のような、温かみのある声だった。それと、よく手入れされている鼻髭も。

「こーちゃん、彼女に振られそうな時に限ってうちにくるのよ」

「そうなんですか？」

「マキちゃんだって見たでしょう？初めてこーちゃんに会った時」

「確か一年前でしたよね……で結局、あの時の中山さんは、その女性に振られたんですよね？」

「そうねえ。そういうことになるわねえ」

「そんなことを知っているマスターは、中山さんとは『腐れ縁』なんですか」

「こーちゃんとは……そうね。長い付き合いね。でも『腐の付き合い』じゃないのよ？ふふふ」

そりやそうですよ、ヨシノさんは男だけど、中山さんは女ですもの、と言いかけてやめておいた。ここでのバイトにも慣れたせいとか、ヨシノさんのおしゃべりのタイミングもわかってきたので、どの話題なら引く張つていいのか、それとも打ち切った方がいいのかわかるから。

「でもマキちゃんは驚いたわよね。さっちゃんには変に誤解されちゃって、しかもあんな風に言われてでもその縁でマキちゃんにバイトを始めてもらったわけだから、わたしはよかったわ。とつても助かっている」

ヨシノさんはそう言うと、自慢の腕時計をあたし

に見せ、「きゆうけい」というくちびるの形を作った。そのあとに続くウインクは相変わらずキュートで、あたしは親指を立てて「ラジャー」と応えた。

ヨシノさんのカフェには、店の外に小さなふたり掛けテーブルがふたつ、店内にはみつつ、そして長いテーブルのベンチ席がひとつしかなかった。店内は十人入れば手狭に感じるほどの広さ。テイクアウトもやっているのに、時間のないお客さんは、専用の窓から飲み物をテイクアウトで受け取るシステムだった。バイトなんて本当なら要らないのだろうけれど（しかもお客さんでこった返すなんてことも滅多になかった）、丁寧な接客を好んだヨシノさんは、あたしがバイトをしたい時間帯だけでいいからと雇ってくれたのだった。

休憩時間になるとヨシノさんに淹れてもらったラテを手に、裏のドアから路地裏に出て飲み物ケースに腰掛けながらぼうっとするのがルーティンになっている。空を見上げれば、路地裏には長方形に切り取られた青空が見えた。あたしの青春ってやつ

だって、ある部分だけを切り取ったらあんなふうに青く見えるんだ。欲をかいちやいけない。おばあちゃんがよく言ってたつけ。好きなものを好きなだけ食べるなんてこと、しちやいけないんだって。

「お疲れー」

裏のドアを開けて中山さんが外に出てきた。右手には「こーちゃんスペシャル」。いつも通り眠そうな顔をしている。

「若者よ。浮かない顔をしているじゃないの」

「浮かない顔をしているのは中山さんの方ですよ。

また振られるんですか？」

「うっ……最近話し方がヨシノさんに似てきたんじゃない？」

「うっ……最近話し方がヨシノさんに似てきたんじゃない？」

「どうも失礼しました」

「名譽の負傷が増えるだけだよ」

「へー」

「恋をせよ乙女」

「またそんな無責任な」

「青空が欲しけりや、手を伸ばさなきや」

中山さんが左腕を上には伸ばし、手を空にかざすと、シャツの袖からハーブ系の香りがふわりとした。

「で、雨に祟られるってわけですね」

「まあねー」

ヨシノさんのラテはおいしいなあとおぼやきながら中山さんはマグにくちびるをつけた。さっちゃんには中山さんより年上だったのかもしれない。今回振られる予定のひとはどうなんだろう。なんとなく疑問に思った。

「で、大学の方はどうなの？行ってる？」

「今はもう夏休みだけど、ちゃんと行ってますよー。体だけは」

「そう。まあよかった」

「女子大つてどこは、あたしには眩しくてですねー」

そうなのだ。たくさんのきらきら女子がいる世界なのだ。色気づいた女子がたくさん。

「そりゃ大変だわ」

「でしよう？」

「うん」

中山さんは立ち上がって、なにやら準備体操のようなストレッチを始めた。といっても右手に「こーちゃんスペシャル」を持っているから、あまりやる気を感じさせないストレッチだったけれど。

「中でゆっくり飲まないんですか？」

「学生さんっぽいお客さんたちが来ててね。苦手なんだ、やけに健康そうで」

なんだかわかりそうな気がした。

「じゃあ、あたしが行きますよ。健康そうな若人らを蹴散らしてきましょう」

「若人つて死語だよ、マキちゃん。それとお客さんは大事にしようねー」

「大丈夫ですよ。あたし外面いいすもん」

「へいへい」

店内にいる学生はどうやら男子二名、女子一名。いつもとは違う年齢層のお客さんだからなんとなく気になって、顔が見えるカウンターに入ってきてしまった。ヨシノさんのカフェには落ち着いたアー

ト作品やレトロな小道具がセンス良く置かれてい
るから、それを気に入って来店するお客さんは自然
と社会人、三十代以上が多かった。あか抜けていて
クールな感じの男子二名は同じ年くらいに見えた。
そして背を向けていた女子一名が振り返った。

「マキ？」

「サトコ、なんでここに？」

それに誰、こいっだれつら。

「サトコ、オマエの友達？」

あたしがそう思ったのと同じく、その男子たちも
あたしのことを吟味した。ううん、知ってたよ。ア
ンタたちのこと、あたしはたぶんずっと前から知っ
てた。

「マキ、ここで働いているの？」

「うん」

「素敵なお店だね。かっこいい」

「ありがとう」

サトコが話している間、男子たちはヨシノさんを

じろじろ見つめてはひそひそ話をしている。サトコ
はセンスがいいし、もう立派な美大生だから、こう
いう店も好きなんだろう。

「もう飲み終えて今出ていくところだったんだけ
どね」

女子にしてはシンプルな財布を取り出すと、サト
コは自分の分のお金を出した。男子一人にテーブル
の上に出した代金を数え直させると、支払いを済ま
せた。

「男子ふたりに女子ひとり。なんだか青春の香りが
するわねー」

カウンターの途中でヨシノさんが軽口を叩く。

「じゃあマキ、またね」

そうだね、とあたしは言いそびれた。そしてドア
が閉まって、背中に冷や汗が流れた。

「うそつき……」

あたしの口から錆びついた鉄の塊がこぼれた。

「マキとサトコのカップルももう見れなくなるん

だね」

「さみしくなるよー」

「最高の百合カップルだったよね。すごくお似合いだった」

高校の卒業式当日、クラスのみんなは残念そうに声をかけてきた。舞台よ、さらば。こうしてショーは幕を閉じ、観客はまた自らの欲望を満たすべく、新たなシアターを探しに旅に出る。そして女子高内におけるエンターテイメント「百合劇場」と共に、あたしというキャラクターはお払い箱になった。

違う大学に行くことになっちゃったけど、夏休みには同級会で会えるね。元気だね。

サトコからそんなメッセージをもらったのは卒業式も終わり、もう帰宅したころだった。夏休みには会えるとは、それまでは会えないということだ。それにだいたい同級会なんてあるのか。そしてたとえそうだとっても、サトコが出席するのとかどうかさ

えも疑問だった。だけどそれを削除したらもう二度とサトコには会えないような気がしたから、メッセージは削除せずそのままにしてあった。

あたしは知っていた。不本意にも親の都合で女子高に通うことになったサトコが、高二の頃に一念発起して、美大の準備コースに通っていたことを。だけどそれでもその件についてはしばらく教えてくれなくて、ついにイラついたあたしは彼女に聞いた。だしたことがあった。どうして週末に遊べないのか、どうして休み中も会えないのか。でもある日、ややうんざりした顔で、サトコは教えてくれた。自分は高校を卒業したら美大に行きたい。そのためにレッスンを練習している。そこには特に気の合う男子ふたりがいて、やる気のある子達だし、話していても楽しいと。

サトコは女子とのべたべたした付き合いが苦手なタイプで、学校では常に女子の集団からは距離を保っていた。なぜかあたしだけが例外で、そのうちサトコとあたしはクラス公認の「カップル」になっ

た。だけどそれは、サトコがあたしを好きだったからじゃない。ただあの学校の中では、あたし以外とは誰ともつき合えなかっただけなのだ。

高校の卒業式は葬式であり、今の今まで、あたしは自分自身の喪に服していたんだと思う。新しく通いだした女子大では友達なんか要らなかった。あたしが欲しかったのは救いで、友情なんていうラッピングペーパーは空しいだけの「ペラ紙」でしかなかった。

サトコは、あいつらとの絆の方を大事に大事に守り続けたんだ。あたしは卒業後、サトコと会うことは二度となかった。さつきまでただの一度も。あたしはサトコの親友にさえなれなかったのだ。

「マキちゃん、さつきのお客さんとはお友達だったのね？休憩時間、ずらせばよかったわ。残念」

ヨシノさんはそう言ってくれたけれど、あたしは顔なんて合わせなければよかったと思ったくらいだ。

「高校時代の同級生なんです。でも違う大学に通うようになって。せいせいしてます」

鼻がつんとするのを我慢したせい、胸が苦しくなった。サトコ達がいたテーブルの上は、拭いても拭いても拭きとれない。涙の粒が、ひとつまたひとつ、こぼれ落ちたからだ。

「マキちゃん、はいこれ。テーブルはいいから、まずはあなたの目の下を拭きなさい」

気が付けばヨシノさんからハンカチを握らされ、肩を軽くぽんつと叩かれた。

「牛乳が切れちゃったの。ちよつと買い出しに行ってくれる？こーちゃん付けとくから。ちゃんと帰ってくるのよ？」

「え？マスター、あたしひとりで行けます」

ヨシノさんが裏ドアを開けて、なにか話をしていく。そしてほどなく呼ばれた中山さんが入ってきた。

「よし、行こう。牛乳だ、ぎゅうにゅう」

そういうと、中山さんはわたしの手を取り、もう一度「ぎゅうにゅう」と言った。

「まだ中山スペシャルにラテが残ってますよ」

「デートだよ、でえと」

「あの……なんというかその……待ち合わせているんじゃないんですか、彼女さんと」

「どうせまた振られるんだからいいよ。これ以上お客さんを減らしたらまたマスターに叱られるしね」

今ぼつくれたら、振られる前にまずは彼女さんに叱られるのではないだろうかと心配したけれど、どうせ振られるなら叱られても構わないのか、などと考えながら、あたしは中山さんと店を出た。いつもの買い出し用のお店よりもずいぶんと遠回りするんだなと思いながらも、中山さんとのデートならそういうこともあるのかと思っただけに驚いた。

「ところで中山さんって、お仕事なにしてるんですか？いつも眠そうな顔してるけど」

「失敬な。フリーライターをしています。たまに写真も撮るけどね」

怒ったそぶりも見せずに、中山さんはわき見をしながらにこにこしている。

「今の仕事好きですか？どうやってその仕事に就いたんだろう」

「好きっていうか、書くことは好きだよ。知り合いに偶然仕事を紹介されて、あつという間になって感じたかな」

「ふーん……」

「おや、不服かな？」

中山さんのこの適当さにイラつかない自分が不思議だった。あたしにとってたぶんそれは、救いに近かったんだと思う。このひとなら、あたしを質問責めにはしないだろう。

「中山さん。あたしね、あたし……たぶん女の子が好きなんですよ」

「ふんふん」

「今行ってる女子大なんですけど……これは女の子がいっぱいいるから行きたかったわけじゃなくて」

「ふんふん」

「聞いてます？」

「聞いてるよ」

「ならいいんですけど」

商店街の脇道を通って住宅街の道を歩く。誰かの家の軒先に紫陽花が咲いていて、そのあわい紫のグラデーヨンがきれいだった。

「中山さんとマスターっていつ出会ったんですか？」

中山さんはお尻のポケットからスマホを取り出すと紫陽花の花の写真を撮り始めた。

「えーとね、十年くらい前かな」

「十年？すごいですね。腐れ縁！」

「でしょう？って顔をして中山さんが笑う。このひとの笑顔は反則で、たぶんこういう笑顔に彼女さんたちは惹かれるんだろうな。いや、わからないけど。」

「ヨシノさんはさ、わたしの兄貴であり姉貴であり、ひと使いの荒いボスであり……なんだろうね、家族」

家族か……

写真を撮り終わると、中山さんは両手を頭の後ろに組んでまた歩き出した。前からチャイルドシート

を荷台に乗せた自転車がやってきて、それに跨っていた幼児がすれ違いざまに、中山さんに向かってあかんべーをする。中山さんは、それにあつけにとられると、大きな声で笑った。

「ヨシノさんのお店、いいでしょう？」

「え、はい……」

「ヨシノさんのグリルドチーズサンドイッチ、あれが好きだね」

「はい、あたしも。初めて食べたとき、感激しました」

「表面がカリッとしてて、バターの匂いがふわってして。中はとろとろのチーズ」

「シンプルなのに、すごくおいしい」

「あれはさあ、作る場所を眺めてるのもいいの。目でしあわせを感じる食べ物だよ、あれは」

中山さんのしあわせそうな顔をまじまじと見つめてみれば、やはりこれは女たらしの顔というものだ。サトコも中山さんに出会っていたら、あんなヤツらとは付き合うこともなかったんだろうか。

「中山さん。どうしたら好きな女の子とつき合える
と思いますか？」

「なにをいきなり」

「ここはひとつ、秘伝を教えてくださいな」

「振られてばかりのわたしに聞いてもあんまり意
味がないと思うんだけどな」

「うーん、違うの。中山さんは女のひとを惹きつけ
るタイプだと思うの」

「なに、マキちゃんはモテたいとかそういう願望が
あるの？」

「うーん……モテたいんじゃない、好きな子と両
想いになりたい」

「それね、すっごく難関」

「えー！」

「両想いになって、それが続かなかつたらどうな
の？」

「えー……まずは両想いっていうのを体験したい
ですよ」

「別れはつらいよ？」

「中山さんの言うことはちっとも信用できない……
…」

「運命の相手に会おうまでは振られ続けるんだよ。
その覚悟はあるの？」

「えー」

「そしてその運命の相手に出会っても、見事撃沈す
ることだってある覚悟だよ」

「なにそれつらい」

「あれ？信じた？」

「え？」

「これはヨシノさんの受け売りだよ。まったく同じ
アドバイスをもらった」

「もーなんですかそれ」

「わたしにもあったのさー、そんな青春時代ってや
つが」

「ヨシノさんもそんな恋をしたのかな……」

「さあね」

中山さんは、そういうと商店街の八百屋さんの目
の前で足を止めた。アボカドをひとつ吟味すると、

バイトらしき女性が、今が食べ頃だとか三個で六百円だとか説明しだした。中山さんは初々しい笑顔でおいしそうだなあ、今日はアボカドとチキンでサラダにしようかなあなどと言いつつ、アボカドを売り込むバイトさんのくちびるの動きを堪能していた。

「中山さん。ぎゅうにゅう、買わなきゃですよー」

「あ、忘れてた」

「だめじゃん中山さん」

ごめんね、と意味ありげな眼差しでバイトさんに詫びると、中山さんはため息をひとつついて、また歩き始めた。

「イクエータで、ヨシノさんからグリルドチーズサンドイッチの作り方を教えてもらったらいよいよ。そして、いつかあの子に食べてもらったらいい。でもマキちゃんに今できることは、あの子から一番遠いところにいることだ」

「え？あの子って……サトコのこと？」

「終わってしまった関係からは、一番遠いところに行くべきだ。泣き止んだらね」

中山さんは、またお尻のポケットからスマホを取り出して、紫陽花の画像を見せてくれた。

「これ、さっきの？」

「これね、一年前に撮ったやつ。さっき撮ったのと同じところのだけだね。きれいだけど、やっぱり生で見るのが一番いいねえ」

「それはそうだけれど。写真だってきれいでしょ？」

「でももう触れないじゃない。終わってしまった花は、もう二度と触れないんだよ」

「じゃあなんで写真なんか撮るの？」

「思い出にするためだよ」

「思い出にしたくない場合は？」

「あの子のこと、まだ思い出にはしたくないって口ぶりだね」

中山さんの憎まれ口は並々ならぬものがある。

「花より団子。グリルドチーズサンドイッチ」

「中山さんのばか」

「お花もいい匂いがするけど、チーズの匂いもたま

「んないよお？」

「ああそうだ、確かサトコもチーズが好きだったな。」

「じゃあ、作り方をマスターしたら、中山さんが最初のお客さんになってくれる？」

「おっけい。その代わりに、味にはうるさいよ？」

「きつとそうなんだろう。中山さんはすぐにはOKを出さないつもりなんだろう。」

「あと、おしやれの仕方も教えて。かつこいい大人になりたいの」

「あたしの推測によれば、このひとはおしやれの上級者だ。」

「甘いよ、マキちゃん。おしやれはそのひとの生き方が出るんだよ。このひとかつこいいなってひとがいたら、いいとこだけ盗むこと。ファッション雑誌のいうことなんか信じちゃダメ」

「えー……」

「トライアンドエラー。恋に落ちて振られる。同じことでしょ？」

「違うでしょ、振られ過ぎ……」

「言うねえ」

「あ、ぎゆうにゆう……」

「じゃあ帰ろっか」

「え？」

「イクエータの斜め前のコンビニでいつかな？」

「まじで？」

「グリコのカフェオーレってあるでしょ？あれが飲みたい」

「ちよ……中山さんそれ反則。ヨシノさんそこ帰ってから飲もうよ」

「たまーに飲みたくなるんだよねー」

「ええええええー？」

結局あたしたちは牛乳を買うこともなく、コンビニでグリコのカフェオーレをひとつ買って、ヨシノさんの待つイクエータに帰った。もちろんその前に中山さんは、ヨシノさんへのリスペクトを怠らず、グリコのカフェオーレを一気に飲み干したので、お腹がたふたふすると文句を言う羽目になった。

「お帰りー。ねえ、お腹減ってない？グリルドチーズサンドイッチ作ったげようか？お客さん来ないのよお……」

「あ、今中山さんは、お腹いっぱいみたいです。マスター、わたし、作りたい。教えてください、作り方」

「いいわよ。フライパンにバターをたっぷり入れてね。それから……」

恋と食べ物の間には、解けそうで解けない数式があるような気がする。あたしはここで、究極のグリルドチーズサンドイッチの作り方を修行することに決めた。あたしはこれからなんどもグリルドチーズサンドイッチを作るだろう。そしてなんども身を焦がす恋をするだろう。その度に失敗して傷ついて、その傷の深さに泣くだろう。

カフェ・イクエータへようこそ。

河島レイ

海外在住の根無し草。

文芸サークル「島田井書店」店主。

歌集「花と剣」、小説「化身の森」、

写真集 "Walking in the Shade"

本作品「イクエータ」は、創作×ご飯の電子雑誌 "Companio" (カンパニオ) に掲載された「コピ」のシリーズ作品です。以下のリンクより、無料でお楽しみいただけます。

「コピ」 <http://p.booklog.jp/book/112426/read>

「週明けに」 <http://p.booklog.jp/book/114319/read>

※この作品はフィクションです。

プレミアム『フライ』デー

巫夏希

じめじめとしたある暑い日の事だった。
時刻は午後六時半。もう既に退社をしており、
地下鉄に乗り込んでいた。

でも、目的地は——家の最寄り駅ではない。

「……腹減ったなあ」

スマートフォンを見ると、メールが数件来ていた。そのスマートフォンは会社から借り受けたもので案件も僕が対応しないといけないものではない。だから別に気にすることではない。

けれど、上司は常にすべてを把握しておけ、
というのがモットーだと言っていた。絶対本人
もそこまで把握していないだろうに、よくそこ

まで発言出来るな、と思っていたけれど、やっぱりこの会社はどこかおかしい——なんてことを思い浮かべるまでそう時間はかからなかった。

「まあ、いずれにせよ」

そんなことは気にしたら負けだ。

とにかく今は美味しいご飯を食べることが出来れば、それでいい。

そう思って俺は、地下鉄を降りた。

◇◇◇

栄。

名古屋にある一大繁華街。

とはいっても、俺はこの街が嫌いだ。あまり使う機会がないからだ。この街に抱くイメージと言えば、歌舞伎町と銀座が合体したような……どこか雑多なイメージだ。ある程度離れているとはいえ、やはりどこか雑多な感じがするのは否めない。居酒屋が多いし。

そして俺が今向かっているのは——居酒屋ではない。

酒は飲める口だ。けれど、仕事で酒を飲むときは大抵愚痴のはけ口にされるから、最近あまり酒を飲むタイミングはなかった。だから、実際の所、その飲み代は美味しいご飯を食べるために使われるわけであって——。

「着いた……」

百貨店の裏手にある、小さなお店。

目的地は、そこだった。

小さい引き戸と、ショーウィンドウには何もメニューが無い。とても小さなお店であることは理解できるだろう。でも、小さい看板にはその店の看板メニューがイラストで描かれていた。

カツ丼。

丼物といえればけっこう油がきついイメージがあるかもしれないけれど——それでも、このお店をそのイメージだけで忌避するのは間違っている。もしそういう人間がいるなら、いいから一度食べてみてくれと言ってみたいくらいだ。

引き戸を開けると、じゅうじゅうとカツを揚げ音が入ってきた。

「イラシャイマセー」

片言の店員が声を掛けてくる。カウンターとテーブルがあるが、テーブルは腰掛けるには少々狭い。ぶつちやけてしまうと楽になって食べ

るなら二階の座敷に行けばいいのだけれど、それは一階が満員にならないと案内されない。

そういうわけで俺が案内されたのはカウンター。まあ、別に悪くない。カウンターから見える調理風景を眺めるのも、乙だ。

「ご注文は？」

片言の店員が俺に問いかける。

注文はもう既に決まっている。そう思って、俺は告げる。

「味噌カツ丼と……、蜆の味噌汁をひとつ」

「カシコマリマシター」

そう言っただけでカウンターの奥へと消えていく店員。

この店は少なくとも三十年近く前からこの場所に店を構えている。なぜそんなことを知っているかと言えば、それは俺がこの店を知っている理由にも繋がってくる。

この店は、両親が新婚旅行で行った店だ。俺が名古屋に転勤になった時、その話をしたところ、その店の話をしてくれた。さすがに二十年以上昔の話だったため、店の場所までは覚えていなかったようだが、店の名前だけは覚えていたように教えてくれていた。

というのもこの店はちよくちよくテレビで取り上げられるほど有名なお店だからだろう。

「失礼します」

先ずは沢庵とおしぼりが渡される。一緒に来るのでは無く、出せる順番があるのだろう。それを何回か来て熟知してしまった。常連、といえるほど来ているのかどうかは正直怪しいところではあるのだけれど。

じゅうじゅうと聞こえるカツを揚げる音。

さくさくと聞こえるカツを切る音。

店に居る客は俺だけだったから、その音は今

俺だけが聞くことの出来る音で、それはどこか何かしらの優越感にも似ていた。

「お待たせしました」

気付けば、俺の横には店員が立っていた。

手に持っているのはお盆。そしてそのお盆に載っているのは、どんぶりだった。

そのどんぶりを見て、俺は思わず涎が出そうになってしまった。

店員はどんぶりをカウンターに置くと、そのまま去って行く。

「お待たせしました」

少し遅れてカウンター奥に居る男性——ずっとカツを揚げている——が言った。片言ではなく、流暢な日本語で。

さて、改めて僕はどんぶりを見つめる。

そこに広がっていたのは、山だ。

どんぶりの上には、四等分に切られたヒレカ

ツがこれでもかと大量に盛り付けられている。しかもそのカツはただのカツではない。味噌仕立てのソースにつけ込まれた味噌カツだ。

味噌カツ。名古屋に来るまで食べたことは無かったけれど、この数年で虜になってしまった。味が濃いものばかりだったけれど、案外昔からそういう料理を好んできたためか、名古屋の味噌は俺にとっても馴染んだ。

真ん中には火山に満たされたマグマよろしく卵がおかれている。そしてその卵は半熟で、いっつ噴火させてもおかしくない状態だ。

「いただきます」

俺は小さくそう言うと、思い切りそのカツにかぶりついた。

味噌カツはソースにつけ込まれているにもかかわらず、さくさくと揚げたての食感だった。そして濃厚な味噌の味が、食欲を増進させる。

味噌カツの味噌はただの味噌ではない。甘い味噌——とでもいえばいいだろうか。ただ塩気のある味噌ではなく、甘味も含まれている。だからこそ、食欲増進に繋がるし、このカツがしつこく感じないのかもしれない。

ご飯も味噌のソースがしみこんでいて、これもまた美味い。カツとご飯があつてこそそのカツ井とはこのことを言うのだ、という再認識をさせられる。

幾枚かカツを食べたところで、俺は卵を箸でつついた。

そして味噌カツ山は噴火した。

黄身は味噌カツ山を流れ落ち、地面のご飯にしみこんでいく。これによって味に変化が生まれていく。まろやかな味、とでもいえばいいだろうか。いずれにせよ一度で二度楽しめる、というのはとても面白いし、食べてて飽きない。

蜆の味噌汁についても、ゴロゴロと入っている蜆の実を取り出して食べるその瞬間がとても好きだ。味付けは非常にシンプル。まあ味噌カツ井を食べる合間に食べるから、これくらいシンプルなものもいいのかもしれないけれど。



そんなわけで。

一人で食べる食事だから別にそんな時間をかけるわけも無い。

十五分もすれば食べ終わり、熱いお茶で一息吐く。

がらがらと引き戸を開ける音が聞こえる。二人組の外国人が入ってきた。金曜日だし、名古屋の観光に来たのかもしれない。だとしたらとてもいいチョイスだと思うし、外国のガイドブ

ツクにも書かれていないのかもしれない。

会計を支払って、俺は外に出る。スマートフォンで時刻を確認すると、七時半。

そういえば今日は新刊の本が発売されるな——とふと思ったそのとき、俺の中で何か考えが浮かび上がった。

それはこの店を見知った理由にも繋がってくるわけで。

「……たまには、連絡を入れてみるか」

そう思って、俺はスマートフォンで電話アプリをタップした。

何が変わると思わない。

何も変わらないし、寧ろ悪化するかもしれない。

けれど、たまには話をする事だって悪くない。そう思う、プレミアムフライデーの夜だつて、あっても良いと思う。

そうして俺は、夜の雑踏へと足を踏み出すのだった。

終わり

例えばの話

豆太

これは例えばの話だが、例えば、君が自炊をするでしょう。いやしないのは知っている。例えばと言っただろ。あの部屋の主は自炊をするんだ、そういう立場に立たなければ話が進まない。自炊をする人間が、一週間も出張に出るその直前にレタスなんか買うか？ 普通買わないだろう。ただでさえレタスなんて足が速いんだ、買う意味がない。その日に食いたいだけならコンビニのサラダでも買ってくればいい、今は袋詰めของ安いのもある。しかし出張には裏付けが取れている。そうだったな？ 会社の方で予定が組まれていた。家主が失踪する二週間以上も前にだ。部屋のゴミ箱からはレシートも出ている。だから、家主はわざわざ足の速いレタスを買って、出張に出た。これは確定事項だ。部屋にあったのはレタスだけではないな。その他の食材もあった。どれもこれも、大した処理はされていない。例えば冷凍庫に入れるとか、そういうことだ。家主は几帳面だった。ゴミは捨てて出ていたし、三角コ

「ナーに生ゴミのひとつもなかった。まあこの季節に一週間も生ゴミを放置したら帰ってくる頃にはウジとコバエのпараダイスになっているだろうから当然だが、それでもかごに洗濯物のひとつすらなかったんだ、男の一人暮らしにしては几帳面と言っていいだろう。だが会社の同僚からそういう証言は出ていない。どちらかと言えばズボラな男だったらしいな。几帳面と言えるのは一点、毎日持参している弁当くらいのものだった。さて、おそらくこの意見は君たち警察の中でも言い尽くされていることだと思いが、これは男の他に誰か几帳面な人間と一緒に生活していたということになるだろう。室内に放置されていた食材にしても、それを食う人間が居ればいい。家主が出張でいない間に、あの部屋の冷蔵庫を開けて勝手に調理をし、食べる。家主に同居人はいなかった。そうだな。誰かと住んでいた形跡も、それを隠蔽した形跡すらない。それもそうだ。話を続けていいか？ 第一そんなことを私が忘れるはずがないだろう。話の腰を折るな。普通、人ひとりがいなくなればその形跡が残る。使っていた生活用品、それを撤去した空白、あるいは毛髪、皮膚のかけら。人間は自分が思っている以上に汚れを振りまく。何もしていなくてもだ。綿埃なんて言うのはほとんど人の垢

だろう？　そういうものを微細に調べれば、必ず人の痕跡が出てくる。当然だ。だが今回はそれが無かった。毎日家主の弁当を作り、家主がいない間にそこで食事をするはずの几帳面な誰かは存在しない。通い妻？　通い妻がなぜ家主のいない間に部屋を訪れる必要がある？　一人の飯なら勝手に外で食べばいいだろう。話の腰を折るなど何度言わせるんだ？　まったく。とにかくだ、あー、どこまで話したか……とにかく、家主と一緒に生活していた誰かは存在しない。指紋だって調べたんだろう？　家主のものしか出なかったはずだ。指紋を拭き取る際、自分のものだけを選んで拭くなんて器用なことができるもんか。家主の指紋があつてそれ以外がなかったなら、指紋は拭き取られていない。最初から無いんだ。ではなぜ食材があつたのか？　一週間も出張に出るのに？　と。最初の疑問だな。次に潰すべきは「家主は出張に出ている」というところだ。家主は出張には出していない。出る予定があつただけだ。道中で消息を絶つたわけでもなく、単にどこにも出ていっていないんだ。それで、さっきの君の話には出てこなかったが、この男には陶芸か何かの趣味はないか？　はは、いい顔をするな。私は人のそういう顔を見るのは好きだ。なぜわかるかつて？　別にわかるわけじゃな

い。推理、推測、当てずっぽうでも言ったほうがまだ近い。理由がないわけじゃないがな。この男は几帳面だ。だが几帳面だとは知られていなかった。今の職場に入って半年だったか？ その前には随分な遠距離を引っ越しているそうだな？　これが何故か。自分の印象を新規に付け直すためだ。ずぼらでいい加減な人間だと。実際は人の作ったものが食えないほど重度の潔癖症だろうがな。そうでなきやコンビニ飯でも食った方がよほど都合がいい。何の話かって？　話題は最初から決まっている、失踪した男の足取りの話だろう？　男は几帳面だと知られてはならなかった。男は陶芸の趣味があった。男は他人の手料理を食うことができなかった。男は出張に行くとき見せかける必要があった。なぜか？　アリバイを作るためだ。君たち警察はそれに引っかかったようだな。男の出張先、確か兵庫だったか、そこに行くには新幹線でほぼ丸一日掛けての移動になる。新幹線のチケットが取られていることは確認したな？　よろしい。男はまずその取った切符で改札を通る。どこかで少し時間を潰す。適当な新幹線が来るまでの間だ。監視カメラがない場所はたぶん予め探しておいたんだろう。そして、「切符を紛失した」と言って同じ駅で改札を出る。だいたいは自己申告で金を払え

ば出してもらえませんが、最悪でも始発からの料金を払えばそれで済む。君たちが引っかかったのはそこだな。新幹線に乗った形跡はあり降りた形跡はない。まるでその途中で消えたように見える。行き先の駅周辺で聞き取りはしても出発駅での聞き取りはしていないだろうか？ いやまあ、知ったことじゃないが。どうせこんな、三度瞬きしたら忘れるような顔、聞き取りだつてろくな成果は得られないだろう。戻ってきた男はかねてより計画していた殺人を実行に移した。殺人だ。この男の知り合い、最近物取りに殺された男、これだな。部屋にある洗濯物を検査にかけてみればいい。おそらくどれもこれもルミノール反応が出るだろう。そして男が生きていけば、「趣味の陶芸でペンガラを使うので」とでも言うんだろうな。ルミノール反応は鉄に反応するだけだ。それがペンガラでも血でもその区別はつかない。色はアルカリ性の溶剤で消せる。それらをまとめて洗い、部屋に干して、空港へ向かう。地上なら半日かかる移動も飛行機なら二、三時間で済むだろう。チケットを取るのに名前が必要だろうって？ そんなのは君らで調べてくれ。私の知ったことじゃない。何のための警察だ。まあ、それで多少現地への到着が遅れたところで、この男は適当な男で通っているんだから「現

地で遊んでいた」とでも言えればいい。どうせホテルのチェックインくらいでしか本人確認はされないのだし、新幹線の中でチケットだって弁当のゴミと一緒に捨ててしまったとでも言えれば済む。そう、男は当人の計算通りなら、問題なく現地へ着いて仕事をし、何食わぬ顔で戻ってくるはずだった。だがそうはならなかった。さて、ここで最初のレタスの話に戻ろう。

男はこれを食うはずだった。加えて、おそらく弁当にも詰める予定だっただろうな。加熱すればかさが減るものだし、成人男性なら半玉くらいは普通に食えるだろう。しかしこれは食われていない。何を意味すると思う？ そう、男の予定が狂ったのはこの時点だ。男は兵庫にも、それどころか空港にも行っていない。ここで死んだんだ。――さて、問題がひとつ残るな。何だと思う？ キャリーバッグだ。出張に向かう途中で失踪したはずの男のキャリーバッグが部屋で見つかった。うん？ ああ、そりゃそうだろう。男は自分で自分のアリバイを作っている。これは裏返せば、男を殺した犯人のアリバイとしても流用できる。使わない手はない。じゃあなぜ犯人は男のアリバイを知っていたか？ 簡単な話、犯人が男の共犯だったからだ。共犯が居れば新幹線についてあんな煩雑な手続きをする必要はないし、

飛行機だって他人の名義で乗れる。どちらも身分証明は必要ないからな。「新幹線の改札を
通って引き返した」のは家主本人ではなかったわけだ。キャリアバッグについては、まあな
んとでも言って持ち出せばいい。知らん。どうせ実物はもう見つかっているだろう？ たぶ
ん新幹線の終点駅の忘れ物センターにでもあるはずだ。そっちも人の手で運ばれているだろ
うから指紋は期待できないがな。犯人？ 犯人ならたぶん、今も変わらず近所でうろろし
ているだろうな。なにせ現場はこのあたりではないんだから、このあたりでできるだけ目撃
された方がいい。家主が信頼をおいていて、犯行時刻にアリバイのない人間だ。あとはまあ、
君たちで頑張ってくれたまえ。

参加者一覧（掲載順）

篠田くらげ(@samayoikurage)

ツイッターで「美術館でナンパしてくる男は最低」というネタが流れまして、そこから逆バージョンを作ろうということでも生まれた二人です。カンパニオ掲載の私の小説について男女カップルが成立したぞ。牛乳好きのみい子にもいつか出番をあげたい。またおつきあい戴けたら嬉しいです。

ボンゴレーノ麴(@peperoncino_k)

この度は末席を汚させていただいておきながらこの厚顔！リーマンと幼女から、リーマンと女子学生に進化しました。何を言ってるか分からねえ！という方はCampanioさんのバックナンバーをよろしくな！

佐々木奈々子(@nanako_tanka)

はじめまして。佐々木奈々子(@nanako_tanka)です。参加させていただきまして本当にありがとうございます。普段は花束りぼん(@hanatabachan)と協力して作品づくりをしております。今回は *piece* と *peace* を重ねたわかりやすい一品です。どうぞお召し上がりくださいませ。

河寫レイ(@ray_kwsm)

実はご飯党なのですが、週末のランチには、フライパンで作るグリルドチーズサンドイッチが手軽で好きです。最初のひと口の「サクッ」とした歯ごたえがなんとも言えず…みなさまもぜひお試しあれ。

巫夏希(@natsuki_miko)

プレミアムフライデーのお話を書きました。まあ、自分の務めている会社には導入されていないんですけどね…。今回は実在するお店の話です。味噌カツ井、美味しいですよ。名古屋に来たときは是非。

豆崎豆太(@qwerty_misp)

ミステリ脳から離れられないまま書いたらミステリ風味のものになりました。喰いタンってあったよね昔？ 参加作品のルールが自分でわからなくなっています。カンパニオは随時ゲスト参加募集しております。ぜひご連絡ください。